
キャグニャ姫

コハフジカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャグニヤ姫

【Nコード】

N8230C

【作者名】

コハフジカ

【あらすじ】

光彦は祖父の田舎で光る竹を見つける。そのなかに入っていた少女は…。

(前書き)

こんにちは。コハフジカです。

最後にため息をついてしまつような話ですが、最後まで読んでいただけたら嬉しいです。

姫は美しかった。いや、そうだとばかり思いこんでいたのだ。

姫を見つけた光彦という高校三年生になったばかりの少年は、祖父の家がある、田舎に来ていた。その林で光る竹を見つけたのだ。光彦はもと「かぐや姫」という話を知っていたから、光る竹は何かあると思いこんでいた。

光彦は、祖父を呼んできてカマを手にした。姫を切ってしまうといけないから、できるだけ上の方をスパンと切った。瞬く間に光りは大きくなって、あたりが金色になった。しかし、竹の中には人はいない。あたりまえだ。もしも、ここによりきりと生えている竹が光っていたとする。カマは手元にある。スパンと切る。そして人が、しかも超可愛らしい！なんてありえるわけないだろう。世の中にはできることとできないことがあるのだよ、ワトソン君。

しかし光彦は諦め無かった。自分がきつた竹を奥まで見てみた。じいっと、祖父は光彦がなにをしているのか全く分からないから、ぼけーっと側に立っていたが、光彦の行動がまか不思議なので、先に家に帰ることにした。

「……居た」

光彦はつぶやいた。居たと確かに言ったのだ。光彦はぐつと奥に手をつつこんで、その「居た」の正体を手にとった。それはそれは手に乗るほどの小さな姫だったのだ。顔は、目を瞑っていてよく分からなかったが、小さな口。大きな鼻。とても可愛いとはいえない顔をしている。そこで、光彦は、かぐや姫をもじって、「キヤグニヤ姫」と名付けた。キヤグニヤというのは、光彦がはまっている学園RPGのヒロインがよく使う言葉である。訳は、そこそこ可愛いである。キヤグニヤとそこそこ可愛いがどうつながるのか訊きたい。しかし、相手はRPGの中の架空の人物のため、それはご勘弁願

たい。

「かわいくねえな」

素直な発言だった。家に持ち帰ろうか…悩んだ。

「お持ち帰りにしますか？それとも此処でお召し上がりになりますか？」

マツクの店員を想像するが、萌えない。実際想像した店員は、中年のおばちゃんだ。これで萌える奴は常時萌えているのである。もうお気づきかと思われるが、光彦はヲタクである。しかし、にちゃんねるなどというネット関係のものには疎い。ただ、秋葉原に行つては「萌え」と嘆くだけである。

「まあ、いいか、持つて帰ろう」

本当に独り言の多い奴である。とてつもなくむなし。

家に持ち帰つて、祖父に見せると、

「それは金魚か？」

と、真顔で訊かれた。人間を金魚に見間違えるとは。相当な大人である。そういえば、祖父は老眼だった。今は老眼鏡を付けていない。ぼやけていて、人間様を金魚に見間違えたようだ。だからって金魚つて…

「キヤグニヤ姫って言うんだ。うちで育ててもいいだろ？」

「かまわんけど…うちに水槽はないぞ」

「金魚じゃないって」

「ありや…」

キヤグニヤ姫は日に日に成長していった。一ヶ月もたつと、身長182cmという、光彦よりも5cmも背が高い。勿論、こんな巨大でおちよぼ口で鼻のでかい女は萌えない。それでも「姫」なのだ。かぐや姫みたいに婿にしてくれという男はこないし、月の迎えもないようだ。寂しい奴だなあと光彦がつぶやくと、キヤグニヤ姫は「みっくんが居てくれたらいーの」と言った。もちろん萌え系ヒロイ

ンが言えば、そうとう萌えるのだが、巨大ブサイクがそれを言ってもうざいだけである。それにみつくん…。正直光彦はキヤグニヤ姫の扱いに困っていた。そろそろ開放してほしい。家族はキヤグニヤ姫をみて開いた口が閉じれなくなってしまった。しょうがないから自分の部屋においているのだが、こうもでかいとジャマでならなかった。

「キヤグニヤ姫よう、そろそろ此処をでてくんねえかな？」

「みつくんはあたしが嫌いななの？」

「いや…そういう訳じゃねえけどよ」

「じゃあ良いじゃないか！」

良くねえんだよ。

キヤグニヤ姫は光彦に惚れていた。光彦の愛している萌え系アイドルに嫉妬するくらい惚れていた。光彦の愛している萌え系アイドルのポスターを何枚か破ったこともある。これこそ、ヲタクの敵。

光彦はあきれていた。もう、こんな姫、いりません。

「キヤグニヤ姫、やっぱり自立しねえと」

「んーあたし、働くのつていやなのよ」

「くつてけねえよ、死んじやうよ」

「みつくんが働いてよ」

「ふざけんな」

その五日後、キヤグニヤ姫は太陽の迎えに吐いていった。案の定、光彦の家は燃えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8230c/>

キャグニャ姫

2011年1月20日00時14分発行